
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 351 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2013.05.02（水）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 1090 部*****

□ 目 次 □-----

<巻頭言> TPP への参加を云々する前に、
日本が一つの“国民国家”ならば、なすべきことがある
塩谷哲夫

<イベントの案内> 中島紀一著『有機農業の技術とは何か』を語る会

<お知らせ> 山崎農業研究所所報『耕 No.129』発行されました

<編集後記> 静かな語りと確固たる決意と

<巻頭言> TPP への参加を云々する前に、
日本が一つの“国民国家”ならば、なすべきことがある

TPP を云々する前に、日本の農村（広く言えば“地方”）を広く、厚く、覆
っている克服しなければならない問題が山のようにある。その一つ....。

3 月 27 日に「2040 年の推計人口」（国立社会保障・人口問題研究所）が公表
された。全都道府県で人口が減少し、65 歳以上の高齢者人口率が 3 割を超える。
なかでも、「人口減（-）」や「高齢化率（R）」上昇の上位をしめたの
が、秋田（-36、R44）、青森（-32、R42）、高知（-30、R41）などである。

これらは、寒冷であったり中央（東京）から遠く離れていたり、県内生産額
のうち農林漁業生産額の割合率が高かったりする地域である。農業生産が盛ん
な南九州の鹿児島、宮崎、熊本は、R は 36~38 と高いけれども、暖かいために
住みやすいようで、人口減は-20%前後と少ない。まあ、これは納得がいくか
...？

ところが、「都道府県ランキング」データを検索してみると、「平均年収

(平成 20 年度)」、「貯蓄高 (平成 23 年度)」、「老齢厚生年金平均月額 (平成 23 年度)」は、東北北部と南九州が全国の最下層に位置していることがわかった。青森 46/44/45、秋田 45/42/46、岩手 44/37/41、熊本 38/41/40、宮崎 42/46/47、鹿児島 37/45/43 である。

ただし、これらの経済的な指標と、そこをふるさととして暮らす“幸せ度”とは違うのだろうと思う。しかし、人口減少、高齢化が進行して、買い物や医療などの生活条件が悪化したら、安心して幸せに暮らすことが出来なくなってしまいうだろう。

その他のさまざまなデータに当たってみたが、地方、農村の疲弊した姿があまりにも鮮明に浮かび上がってきて、こんな惨状に貶められていたのかと、考えさせられてしまった。

一方、すべての項目でトップはダントツで東京であった。ただし、人口が過密化し、諸物が密集した都会では、“生き馬の目を抜く”競争の激しい格差社会の矛盾が渦巻き、地方農村とは違った問題があるかと思う。

しかし、これは何も今にはじまったことではない。1950 年代の終わりごろ、私が高校を卒業して郡山から東京に出てくるのに乗った汽車は、農村から都会に出てくる若い人たちでいっぱいだった。考えてみると、それは今日の、そして明日の日本へ向かう直通列車だったのだ。このまま今の運転士に任せて、TPP 行き、原発再稼働行き、格差拡大行き...の新自由主義路線を走らせていて良いのだろうか。

私たちは農業・農村の現状をしっかりと捉え、TPP 参加によって日本の農業・農村が大きな打撃を受けて衰退し、国土が荒廃する前に、“制度的国家”を担っている安倍政権に<彼等がすでに日本が“国民国家”であることを放棄していることが明白ではあるけれども>、日本の豊かな環境・資源・歴史を活かして、農業・農村を再生・活性化する方策をとらせなくてはならないのではないだろうか。

塩谷哲夫

山崎農業研究所 幹事, 東京農工大学名誉教授

yamazaki@yamazaki-i.org

<イベントの案内> 中島紀一著『有機農業の技術とは何か』を語る会

中島紀一さん（茨城大学名誉教授）がこのたび『有機農業の技術とは何か』を農文協から出版されました。本書は「有機農業の技術とは何か」について集団的検討の中間報告であるとされており、その集団的検討の中心にいた著者の有機農業技術研究の到達点が示され、これまでの農業技術の考え方に対して大きな転換を迫る問題提起が含まれています。

そこで本書の出版を機に、共に歩んできた仲間も参加して、どのような「中間報告であり、「到達点」とはどんなことなのかを、その内容を多角的に議論する批評会を開催いたします。本書に登場する方々も交えて、率直で有意義な議論の場になることを願っています。

◆日時 2013年5月12日（日） 13:30～16:30

◆場所 東工大イノベーションセンター 多目的室1

〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6

<http://www.cictokyo.jp/access.html>

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車（東口） 徒歩1分

都営三田線・浅草線 三田駅下車 徒歩5分

◆プログラム

【1】著者挨拶 中島紀一氏（茨城大学名誉教授）

【2】コメント 明峯哲夫氏（有機農業技術会議）、本田廣一氏（興農ファーム）、谷口吉光氏（秋田県立大学）、大江正章氏（コモンズ）

【3】総合討論

◆資料代 1000円（終了後、懇親会を行います。会費3000円程度）

◆呼びかけ人 明峯哲夫・澤登早苗・谷口吉光・長谷川浩・本田廣一

◆協賛 農山漁村文化協会

◆連絡先 飯塚里恵子

TEL : 090 - 1845 - 1016

E-mail : momoham4@hotmail.com

<お知らせ> 山崎農業研究所所報『耕 No.129』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.129』が発行されました。

ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

目次（抜粋）

《土と太陽と》（巻頭言）

TPP は食の安全を破壊する？◎野口 勲

〔第 38 回研究所総会・第 36 回山崎記念農業賞〕

総会挨拶◎安富六郎

第 36 回山崎記念農業賞贈呈式（NPO 法人 福島県有機農業ネットワーク）

〔選考委員報告〕◎田口 均

〔お礼の言葉〕◎渡部よしの

〔受賞にあたって〕有機農業が拓く持続可能な地域づくり◎菅野正寿

〔お祝いの言葉〕◎高橋久夫

〔総会記念フォーラム〕福島県有機農業ネットワークの皆さんを囲んで

(1)3.11 を文明の転換点に◎長谷川 浩

(2)放射能汚染の中での農の営み、この 1 年

—ネットワークの仲間に支えられて◎渡部よしの

(3)つなぐ・結ぶ・創る—生産と消費、現場と研究◎大江正章

〔特別寄稿〕

自然栽培を追いかけて◎元田裕次

「坂の上の雲」から「崖の上のポニョ」へ◎吉田太郎

〈連載〉“生きもの語り”の世界から〈1〉

「生きもの語り」は科学への違和感から生まれた／宇根 豊

<編集後記> 静かな語りと確固たる決意と

先日開かれた、「改めて内部被ばくの問題を考える」という講演会（大地を守る会主催）で児玉龍彦さんの肉声をはじめて聞いた。児玉さんといえば、福島

第一原子力事故後に行なわれた衆議院厚生労働委員会での参考人説明での満身の怒りをこめた発言で一躍時の人となった東大教授である。

<http://www.youtube.com/watch?v=O9sTLQSZfwo>

ところがたいへんおどろいたことにほんとうに小さなそして落ち着いた声でしゃべられるのである。

淀みのない語りが印象的だったが、おそらくは今回のようなテーマで何度も話されているからというのも、その理由のひとつなのだろう。

非専門家に対してどう伝えていくべきか、そのことを常に考えている。それは、科学と現実の場面とをどうすりあわせていくのか、いけるのかについて、この2年、身を削るようにして思索し、実践してきたことが大きいのではないか。

児玉さんは原発事故直後から放射能除染にきわめて積極的にかかわってきている。そしてそのことに対して批判的な声も根強い。

会場からも「現在でも、1時間当たり1000万ベクレルの放射性物質が放出されるなかでの除染はたちごっこではないか？」という質問があった。

これに対して児玉さんは「放出されるグロスの量と、そこから出られない、個々の人々の暮らしの場をどうするかは分けて考えるべきではないか...」と応答していた。

「人が汚したものを人がきれいにできない訳がない」というのが、児玉さんの科学者としての信念である。児玉さんには、被災地に現実に生き暮らしている人たちにどう寄り添うか、という思いがまずあるのだろう。そこから、自身が学んできた科学から適用できる分野を確定し、それを現場の技術に適応していく...ということなのではないか。

この手の講演会には珍しいくらい質問が相次いだ。一人の質問者とのやりとりがうまくいかなかったのだが、会の終了後、児玉さんが質問者のところへとさっと歩みより、やりとりを続けたのである。そこに彼の生き様が集約されているような気がしてならなかった。

*当日の講演の様子は下記サイトから見る事ができる。

<http://www.ustream.tv/channel/dwmk-hkouza>

2013年05月02日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売

『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

(発売：2008/11 定価：1,575円)

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんのお書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん(文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授)

グローバルの次は何? ~卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん(大地を守る会)

ブログ:大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん(長野県農業大学校教授、執筆者)

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん(拓殖大学政経学部)

ブログ:代替案 書評:『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん(イラストレーター・ライター)

ブログ:神流アトリエ日記(3)「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ:本に溺りたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

(2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優)

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎小谷敏さん (大妻女子大学)

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ (2009/01/31)

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん ((株) 共に生きるために)

月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎塩見直紀さん (半農半 X 研究所、執筆者)

ブログ：半農半 X という生き方～スローレボリューションでいこう！
立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名 (見出し) を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字 (機種依存文字) のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 352 号の締め切りは 05 月 13 日、発行は 05 月 16 日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 351 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2013.05.02（水）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

*****ここまで『電子耕』*****